



読者の文化情報誌
デュエット

Duet

2024 春 vol.148

特集

伊野部の郷土誌3部作完成

私の出版体験

若林憲秀さん

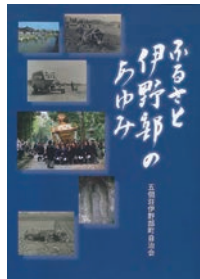
INFORMATION STATION 催し案内 2024 春

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

旧五個荘町ですが近江商人のイメージはなくて、純粋な農村集落という印象です。

区民総ぐるみで取り組んだ1冊目



『ふるさと伊野部のあゆみ』

A4判上製本 総256頁
2008年1月1日発行

まずは、最初の1冊目は16年ほど前の発行となりますが、皆さんの中で関わっておられた方は？

北川純一 みんな関わっています。1冊目の『ふるさと伊野部のあゆみ』の編集長は持田さんで。

持田長三郎 1冊目の編集委員会ができたのが平成15年(2003)1月ですから、20年以上前ですね。委員7~8人が分野ごとに四つの部会を設けまして、総勢31人とたくさんの方に編集に関わっていただきました。

北川(純) 本来に区民総ぐるみみたいな感じでした。補助金なしで、制作費は全額自治会で負担しました。

50戸もない小さな集落で、そうした話



↑惣倉に保管されている古文書類
(辻村耕司撮影)

が出たのは、きっかけがあったのですか。

北川(純) 今回の3冊目でも写真を載せたのですが、平成元年(1989)に『五個荘町史』が編纂されるにあたって、建部神社の神輿蔵の2階に保存されていた大量の古文書を分類・整理していただけたんです。江戸時代前期から明治・大正時代の古文書が1300点余り、それには江戸時代の四ヶ村相論(そうろん)図や明治6年(1873)の地券取調惣絵図などもふくまれています。

いまは、伊野部公会堂の隣の惣倉(そうぐら)に移動させて保管しているそれらの資料が、1冊目をつくるベースになりました。

伊野部には、いろんな種類の講などが残っているという特徴があることに、お住まいの皆さんも目覚まされていたのですか。

北川(純) かなり残っていたのですが、それが時代とともに変わってきていましたので、今のうちにお年寄りから聞いて記録を残しておかないと、もうわからなくなってしまうだろうと考えたんですね。

持田 昔のしきたり、伝統文化みたいなもののよいところを、次の世代に引き継いでいきたいということが、大きな狙いでした。北川(純) その点では、1冊目の後書きにも書いてありますが、平成元年(1989)から龍谷大学地域総合研究所が五個荘町(当時)の集落を調査をなさったことも、きっかけの一つです。社会学部の口羽益生教授(現名誉教授)を中心に10人ほどの先生方が伝統的な社会組織とその変化など

をお調べになり、『地域総合研究』第2号(1992年)という報告書を出されました。伊野部もその調査の対象になったので、講組織の種類やメンバー構成はもちろん、年間の行事などがどのように行われているのか、どういったことが行われてきたかなど、非常にややこしい講の組織についても詳しくお調べになってまとめられていたので、大いに参考としました。

旧五個荘町域で、伝統的に近江商人をたくさん輩出した金堂(こんどう)のような集落と、伊野部のような純農村集落の文化の違いを比較するために、それぞれの住民の意識調査アンケートもありました。

なるほど。そこで、改めて住民の方が自分の集落の文化などを意識し直した面があったのですか。

北川(純) そうですね。それと自治会史の制作は、お年寄りの活性化というのも目的としてありました。高齢者にいろんなことを話してもらうことは生きがいづくりにつながるということで、部長も務めていただいたんです。

1冊目の編集過程で覚えておられることはありますか。

持田 とにかく、毎月1回程度、夜にたくさんの人に集まってもらいました。これは皆さんの理解がないと、なかなか集まっていただけじゃない。龍谷大学の調査を参考にさせてもらっている部分はありましたが、とにかく定期的に皆で集まって、了解を得て進めていくという感じでした。

北川(純) 1冊目の特色として、アンケートによる意識調査を全戸に対して行い、巻末に掲載しました。

それから20年たった3冊目の今回も、この時点と比べられるように同じアンケート調査をやりました。時代とともに、習慣や

しきたりがどう変わってきたのか、そういうものが、伊野部ではどう続いてきているのかという調査です。そうした調査をする、全員が自治会史に関わっているという意識を持ってもらえると思うので。

山田和彦 私が2年前に自治会長をしたと

神社の歴史と祭礼をテーマとした2冊目



『ふるさと伊野部のあゆみ 補遺 鎮守の社と建部神社』
A4判上製本 総164頁
2020年4月1日発行

その後、1冊目の補遺として、2冊目の『鎮守の社と建部神社』をおつくりになられた経緯は？

北川(純) 神社の中嶋邦晴宮司のお宅から新たな古文書がたくさん見つかったんです。明治・大正時代の山の神古墳の調査記録や神額を揮毫(きこう)なさっている久邇宮邦彦王との関係がわかる記録などをふくめて、祭礼などの神社にまつわることを中嶋宮司に執筆いただきました。

地域のシンボルとして、建部神社の存在はかなり大きいのですか。

持田 建部神社の創建は、それこそ神話の時代の話ですが、その後、天武天皇の時代に栗太郡勢多(大津市瀬田)に遷されたのが現在の建部大社だとされています。建部大社の側の記録にも、そう書いていますので、つながりはあるのでしょうか。言ったら

※1 建部大社 大津市神領にある神社。近江国一宮。

※2 建部祭り 伊野部をふくむ建部郷17か村が合同で行う例祭。4月に建部神社、苗村神社(五個荘木流町)、日吉神社(建部日吉町)で行われる。日吉神社に7基の神輿が宮入りする。

きに、近江八幡市安土町から、箕作山から流れ出て西の湖に注いでいる山本川の源流地点を探しているという人が来られました。自分の地域の歴史を調べている方だと思うのですが、『ふるさと伊野部のあゆみ』を購入されました。

母屋よりも新家の方が大きくなっているわけですね。

昔は、建部大社の大祭の時には、建部大社から招待を受けて参拝したというのを聞いています。私たちの世代では、そうした習慣もなくなっていました。誇りのようなものはあります。

北川(純) 最近境界内にある「瘤のケヤキ」が「ガン封じ」のパワースポットのような扱いで有名になり、遠くからたくさんの方がいらつしやいます。

この「建部神社編」は、手にしたお年寄りの方が結構懐かしがられていました。特に祭礼に関して、女性の中には入ってやっていないので、「どういう祭りなのかがよくわかった」と言っておられました。

近江商人の装束を着て、とても大きな神輿を担ぐ、金堂や宮荘と同型ですが、近江商人とのつながりはどうなのですか。

北川(純) じつは近江商人は、伊野部にいて、あまりイメージがないんです。集落の真ん中を伊勢道(御代参街道)が通っている

人々のくらしとお寺をテーマとした3冊目



『ふるさと伊野部のあゆみ 補遺 人々のくらしと正福寺』
A4判上製本 総200頁
2024年3月31日発行

↓日吉建部神社での建部神社神輿宮入り



たので、それなりに情報が入ってくる地域だったと思います。近江商人として成功した人も、伊野部から出ていますが。

建部祭りの下の郷の装束は、脚絆をして尻まくりした近江商人の旅装(金堂や宮荘と同じ装束)ですが、上の郷の日吉、北町などは半纏姿で神輿を担ぐので、同じ建部祭りでも少し装束が違います。

伊野部は純粋な農村集落という印象です。一軒当たりの田んぼの面積が伊野部は旧五個荘町では上位クラスでした。それは生活のベースになっていたでしょう。だから、身近な神社仏閣に対して、いろんな奉仕をしてこれたのかと思います。

— 次の3冊目は、『人々のくらしと正福寺』ということで、寺院編ですか。

北川(純) お寺のこととあわせて、地域の自然と昔と今の暮らし全般をまとめたような感じ。毎月自治会が発行している『伊野部通信』の記事がベースになった部分も



↑『伊野部通信』
3冊目に転用された記事も掲載。毎月発行で160号を超えた

多いです。

——浄土宗のお寺、正福寺に関する第3章を、関住職が執筆なさったのですね。

関正見 私自身は奈良泉の出身で、前住職に息子が生まれなかったので、30年ほど前に伊野部に来たというかたちです。この機会に自身の寺の歴史を詳しく知ることができました。

——最新の3冊目は、第1章が「伊野部の自然」です。

北川(純) 正福寺に居着いていたアライグマの写真も載っていますが、なるべく目にした野生の哺乳類や鳥も撮影するようにしました。ただ、昔はよく見かけた野ウサギが、今は見られなかったり。

——第2章の「いとなみ」では、箕作山と住民の結びつきの変化などもあわせてお書きになっていますね。

北川(純) 昔はアカマツが多い山だったので、柴刈りに山へ行っていたのですが、それをしなくなったから、アカマツが枯れてすべて枯れてしまいました。

その次に、カシなどのドングリのなる木がナラ枯れで全部枯れかけてきました。

北川宏 以前は薪や木の葉などを取りに行っていたのですが、石油や電気にエネルギーが変わったので、長い間、ほったらか

しの状態になっていたんです。

伊野部の山地は基本的に建部神社と正福寺の所有で、それを区画割りして個人に貸し出し、それぞれが管理していたのですが、それでは管理できなくなっていました。現在は里山の整備事業として、木々の間伐をしています。

平成26年(2014)度から始めた里山整備事業は、永源寺森林組合さんの方からお声掛けいただいた森林経営委託契約を結んだもので、国や県、市の補助金が出て、自治会の負担はほとんどありません。現状で、おそらく間伐が8割方進んだので、山の中に光が入るようになって、きれいな山になりました。向こうの織山でも、同様の事業をかなり進めておられます。

北川(純) 昔は本当にマツタケが多かったです。山へ行ったら、手籠(てかご)いっぱい簡単に採れました。生えるところは決まっていたので、それを人に知られないようにしていました。採ってきたら銀紙(アルミホイル)に包んで、風呂の焚き口に放り込んでおくと、蒸し焼きのマツタケができました。それを割いて、醤油をさして食べるんです。辻野 妻が子どもの頃、前掛けに入れてもらって帰ってきて、もう一回山へ行つて、



→カキ
秋の一番水位が下がった時期に、藻の中に隠れた小魚を藻ごとかき上げて捕る漁具



↑ドンジョフミ
ヨシの中に隠れている魚を、この中に追い込んで捕る漁具

※3 ハリヨ トゲウオ科の淡水魚。全長5

6cmで、滋賀県北東部と岐阜県南西部にのみ分布。環境省レッドリストで絶滅危惧ⅠA類に指定。

※4 アユモドキ ドジョウ科の淡水魚。全長

15〜20cmで、琵琶湖・淀川水系ではほぼ絶滅したと考えられている。環境省レッドリストで絶滅危惧ⅠA類に指定。

またもらって帰ってきたと、よく言っていました。

——鳥や魚についてはどうですか。

北川(純) 伊野部は、愛知川の伏流水が箕作山にあたって進めずに吹き出るので、その湧き水でできた西の沢と吉住池(所在は東近江市建部日吉町)という二つの池がありました。つまり、きれいな湧水地帯にすむ魚がいっぱいいたんです。それが、愛知川の上流にダムができた、近くの工場の廃液を流されたりして、ハリヨやアユモドキといった魚がいなくなりました。

とくにハリヨはいいいました。川に釣り針を落とせば、ハリヨがポテジャコが釣れました。ハリヨなんて、骨ばかりで食べられない魚なので嫌ったものです。よそでは味噌炊きにしたところもあるそうですが。それから、ウナギやナマズ、ハイ(オイカワの幼魚または雌)……。アユは一時ほとんどいなくなったのですが、いま、戻ってきています。それにホタルもやっと回復してきました。

吉住池のことを地元では「ゆるが上溜め池」と呼んでいたのですが、秋の水が引く時期の魚捕りに使われたカキやドンジョフミという漁具も紹介しています。

——次の農具の章でも非常にたくさん写真が掲載されています。

北川(純) 明治5年(1872)に伊野部村が滋賀県へ提出した「農具類取調書下帳」という絵図面入りの古文書があったの

で、同じものが残っていないか調べたりしました。

『NHKの朝の連続テレビ小説「エール」』に映ったので、使い方がわかった道具の話はおもしろいですね。

北川（純） そうそう。深尾さんという方のお宅にあった道具なのですが、誰も何をする道具なのかわからなくなっていました。

← 蔴織機
上方から蔴を根元側からさし込み、側面のハンドルを回して蔴族（写真下）をつくる道具。蚕を蔴族の中に移して繭をつくらせた。



※5 『エール』 NHK「連続テレビ小説」第102作として2020年3月11月に放送。作曲家・古関裕而をモデルとした主人公の生涯を描いた。

※6 小幡人形 東近江市五個荘小幡町で作られている伝統的な土人形。江戸時代、小幡に住む飛脚だった安兵衛が京都伏見で製作技法を習得し作り始めたことされる。

昔は農家の多くで養蚕もしていたので、そのために4軒で共同購入なさった「蔴織機」という道具でした。

郷土玩具である小幡人形の紹介ページも特徴的です。

北川（純） 子どもが生まれると親戚がお祝いに小幡人形を贈ったりして増えていくんです。ただ、旧五個荘町内でも、金堂や川並ではそんな習慣はないそうです。隣の平阪や木流でもあまり小幡人形を持っていません。一方、建部日吉や近江八幡ではわりに持っているらしいです。

女の子なら雛人形といっしょに、男の子なら端午の節句に飾る習慣があるので、何軒かお願いして写真を撮りました。

多数の講組織が残る

伊野部の特徴として、講と呼ばれる組織が多く残っていることもありますね。

関 講組織は、大神講（神明講）、愛宕講のような神社系の講組織と、庚申講、念仏講、地藏講、尼講のような仏教系の講組織があります。

いわゆる「スキヨリ（同好の集まり）」というもので、その講が立ち上がった経緯も、それぞれ違います。お寺の講の場合も、先々代の和尚さまが主導されて、きちんとした組織をつくられた講と、自然発生的に続いている講の2種類がある気がします。

現代の講は、あまり宗教色はなくて、親睦組織みたいなものなそうですが、その

イメージでよろしいですか。

関 そうですね。伊野部の場合は、それぞれの講に神主や住職が呼ばれて、お勤め（読経）などの宗教行事をきちんとしています。それがなくなると、宗教色がどんどん薄れて、一杯飲み会の会になったりしていくのかなと思います。

今も複数ある地藏講のすべてに呼ばれて、全部を回っています。その中には、もともとは一年交代で順番に「講元」となったお宅を回っていたのですが、個人の家では人が入りきらないので、お寺でやってくれという希望が出て、集合場所がお寺になったものもあります。



↑ 小幡人形
右のように、雛人形とともに出して飾る家がある

そうした変化はありながら、みんな存続させる方向で知恵を絞ってきたので、残っているところでしょうか。

皆さんも複数の講に参加しておられるのですか。

持田文男 たいてい二つ三つ、三つ四つに入っています。

北川（純） 私の場合、地藏講、神明講、愛宕講、念仏講、庚申講の五つに入っています。天照大神を祀る大神講は、お伊勢さん（伊勢神宮）に参るんですよ。

北川（純） 通常は毎年、一人が代参で参るのですが、7年に一度、全員で参拝する「講倒し」というのもあるんです。

代参ではない「講倒し」や、それといっしょに行う「講結び」というのは古いしき



たりで、それが伊野部には残っているんです。同じ大神講でも、東出講、中出講、沢出講と分かれていて、さらに別の講でも二つ、三つに分かれて活動しているところもあります。

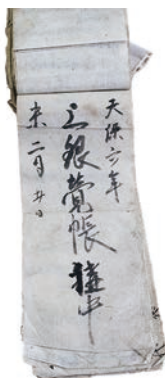
——年に何回が集まりがあるのですか。

山田 神明講は3回。

北川（純）ももとは6回だったものが、4回になったり、3回になったり。どの講もだんだん簡略化はされてきています。神明講は別ですが、そして、必ずしも同じメンバー同士が同じ講に入っているわけでもない。

持田 所属する講は隣近所でも違うんです。尼講と念仏講は男女別ですが、他は家単位での加入というかたちです。

北川（純）当主がいなければ、その女性の人が出てきたりしています。一冊目で講組織の現在のだいたいの状況をまとめたのですが、中にはいつから始まったのかわからないものもありました。



↑愛宕講（北出）の巻帳
天保6年（1835）と記載



↑愛宕講（東出）の講箱 弘化2年
（1845）の文字がある

掛金帳などが入った講箱を当家（とうけ）になった家ごとに順番に回して、講を一回やることに帳面にどこで何をどうしたといった記録をしています。

今回の補遺では、メンバーの家で回している掛け軸や講箱、掛金帳なども写真入りで紹介しました。すべて江戸時代後期から使い続けられてきたもので、掛金帳にある「焚き番」の一番古い記録は宝暦2年

全国的にも珍しい両墓制

——また宗教的な特徴ですが、旧五個荘町域では、墓地として全国的にもわずかな地域でしか残っていない「両墓制」が受け継がれているそうですね。

関 奈良にはなかったもので、こちらに来て、すごいなと思いました。珍しいのと同時に、維持する手間が大変だと思います。

本来、日本では土葬だった時代がずっと続いてきて、昭和40〜50年代ぐらいから火葬が一般化した中で、土葬用の墓地はそのまま、墓石を置く墓地に変わっていきまし

（1752）でした。講自体が始まったのは、もっと前かもしれません。

辻野 私は彦根の生まれなので最初は驚きましたが、彦根でも子どもの時には、お寺におじいさんやらが行っていったような記憶がうっすらありましたから。

北川（純）よそには行者講や日待講といった、伊野部にはない別の講もありますし。関 行者講は奈良県の大峰山（おほみねさん）へ参られます。

た。この地域は、昔から埋葬地と「拌み墓」を別々に持っておられたわけです。きちんとした拌み墓をお寺の境内などに持っておられたのですから、やはり豊かな地域だったと思います。

土葬用の墓地に一回墓石を立ててしまふと、もう一度そこで土葬をするというのは無理なので、今後エネルギー危機などが起こって火葬ができなくなったような時には土葬用の墓地があつてよかったとなるかもしれません（笑）。



↑正福寺の境内墓地「拌み墓」

↓五個荘奥町にある「三昧墓（さんまい）」



——土葬用だった墓地は、愛知川のそばにあるのですか。

辻野 奥村（五個荘奥町）にあります「2ページ地図参照」。奥と伊野部と建部下野、平阪の4集落が共同利用しています。

北川（純） もともと、愛知郡と神崎郡の境界にあたる場所で、そこにつくられたのだったと思います。昔は、「サンマイ道」といって、墓まで歩くルートが決まっていた。

関 いまは川筋が変わらないように堤防ができ、川側に道路もありますが、おそらく愛知川の河原だった場所でしょう。昔は、大雨による洪水があれば川筋もあちこち変わって、なかなか大変だったと思います。

——両墓制であることを皆さんは特に意識しておられないのですか。

北川（宏） 特に変な感じはしません。当然のこととして生活してきました。

関 昔は埋葬地に遺体の全身を埋めていたわけですが、いまは灰だけを埋めるかたちになっています。現在、一般的な墓石の中に灰を納めるかたちでは、いづれいつぱいになってしまいますから。川原の地面に埋めて自然にかえすというのは、一番理にかなっているようにも思います。灰や骨を納骨堂に納めるかたちも、いづれはいつぱいになるので、完全に自然にかえす場所がある点で、伊野部はすばらしいと思います。

最近では遺灰を海にまいたり、山にまいたりする散骨というのを望む方もいらつしやいます。遺骨や灰は埋葬許可のあるところにしかなめられません。奥町の墓地に遺骨や遺灰を納める際は市役所が発行した埋火葬許可証を必ず遺族の方が持参します。一方、お寺のお墓は「拝み墓」なので、埋葬地にはなっていません。

辻野 墓石が置いてあるだけですな。

——他にお寺関係や習俗などで、奈良と違うと思ったことはありませんか。

関 お墓のことが際立って違うなと思いましたけど、お盆の「棚行（棚経）」を夜中に回ることもびっくりしました。棚経というのは、お盆の8月13、14、15日くらいのお魂がおうちに帰ってきているところへ和尚がうかがって精霊棚の前で読経する行事で、浄土真宗以外はどの宗派もほぼ共通でやっています。

——私は浄土真宗なので、知らないんです。

関 3日間のうちにすべての家のお仏壇を回るのが、普通は朝か昼から夕方までの日中の時間帯です。ところが、伊野部では出発が夜の7時で、一晩かけて家々を歩くと言われて驚きました。

近隣の集落のお寺でも、そんな習慣はなかったもので、どうして伊野部だけそうなのか、あちこちに聞いて回りました。推測の域は出ませんが、昔はお盆のときに里帰りしてきた子らを迎えて夜通しの宴会をしていた。だから、和尚が夜中の何時に訪れても、文句を言う人はいなかったのだろうと。和尚が「ごめんやっしや」と言って、10分か15分ずつお勤めをするのにくっついて集落の人も親戚の家に行って一杯よばれた



↑正福寺で催されている乳幼児とその保護者を対象とした「親子教室」

りして、わあわあやってはったというのが、夜に回る意味なのではないかというのです。ただ、私が来た当初の30年前には、夜通し宴会をしているような家はほぼありませんでした。

——棚経の時間帯の習慣だけが残されているたわけですね。

関 総集会のときに夜から昼間への変更を提案したことがあるのですが、当時は却下されてしまいました。「いや、大丈夫です」とおっしゃって。

私も最初のころは、夜中の2時ごろまで回って、そこから2時間ほど仮眠させてもらって、朝の4時からスタートをもう一度して回っていたんです。

それが、だんだん、各家の都合も変わってくるし、もうあまり夜中は困るとおっしゃるうちも出てきました。それで、うちの寺側も、息子が使えるようになってきたら、二人で回るようにして、夜の7時出発は同じですが、11時ごろにいったん終え、翌日の早朝からというかたちになりました。北川（純） 今回、関住職に執筆していただいた中では、昔からの行事だけでなく、子ども向けの「てらこや」や高齢者向けの「ふれあいサロン」といった新たな地域密着の催しも紹介していただきました。

正福寺は伊野部において、宗教や信仰という言葉だけでは言い表せない役割を担っていただいたいだと思います。

——最後に話を変えますが、特に3冊目を見てまず感じるの、掲載写真が大量であることです。これは？

一同 それは北川さん。

北川（純） 引込んだパンフレットを集めるのが好きなコレクター気質が出ました。

——本日は興味深いお話をありがとうございました。

『続 ふるさとつれづれ散歩』

『麦笛吹きて故郷に』

わかばやし けんしゅう
若林 憲秀さん〈滋賀県蒲生郡日野町在住〉

プロフィール

1925年1月8日、日野町首羽生まれ。1944年9月滋賀師範学校を卒業、北比都佐国民学校に奉職、以後42年半、教育関係で勤務。臨済宗永源寺派方廣山神清寺前住職。俳誌「雪解」「銀杏」同人。俳号・建秋。俳人協会会員。

きつかけは合同句集

今年99歳を迎える若林さんは、20代から熱心に俳句に取り組んでおり、地域の合同句集『雪解しづく』（1990年）などを通じてサンライズ出版と出会った。その後、1995年に第一句集『麦笛吹きて故郷に』を刊行。2023年には白寿を記念して日野俳句会と文化協会により、「わたむきホール虹」の前に句碑が建てられた。

紙の本の持つ力

第一句集出版の年から若林さんは地元公民館報に歴史散歩の記事を連載。70回をめぐに『ふるさとつれづれ散歩』を大手出版社でまとめ、連載は100回を迎えた。

同書は地元小学校の「ふるさと学習」に重宝されており、未収録分の書籍化の要望が寄せられた。そこで長男の正秀さんの原稿入力や校正、写真の準備の協力を得て、2023年に『続 ふるさとつれづれ散歩』を刊行。今回は昔から縁があり、内容など要望を伝えやすいサンライズ出版を選んだ。

若林さんは「地域のことに本腰を入れたのは退職後」と当時を思い出す。公民館報の連載で古老年代に話を聞く中、地元の歴史の奥深さを感じるようになった。「便利な世の中になりましたが紙の本の価値はまだあります。例えば古老の知恵を残すいい媒体ではないでしょうか」と出版の醍醐味を語った。

日野の公民館報に連載した歴史読み物「つれづれ散歩」をまとめた第2巻。1巻刊行後に連載した30回に加え、祖父の手紙類を収載したもの。

神清寺にて『続 ふるさとつれづれ散歩』を手に微笑む著者



出版記念講演会

『聴導犬ポッキー いつもいっしょ』

4月中旬発売



4月28日(日) 14:00 ~ 15:30 (受付開始13:30)

耳の不自由な人を支える「聴導犬」のお仕事を子どもでもわかるように描いた絵本の作者お二人が、作品に込めた想いと制作秘話を語ります。

- ・絵本の読み聞かせ 五十嵐芳子さん
- ・絵本発刊の想いと制作秘話 五十嵐恵子さん×酒井幸代さん
- ・ポッキーとの手の合図実演

会場 ●アル・プラザ彦根4階 COZYTOWN A ルーム

彦根市大東町2-28 JR彦根駅西口下車すぐ

参加費 ●無料 定員 ●50名

お問い合わせ・お申し込み ●サンライズ出版 TEL 0749 (22) 0627 FAX 0749 (23) 7720

Email info@sunrise-pub.co.jp

ありました。

本展では、石山寺に伝わる紫式部聖像と、紫式部が仕えた藤原道長、彰子親子によって制作された埋経^{まいきょう}の遺品とともに、同時代に制作された仏教美術を展示し、紫式部が生きた時代の仏教文化を紹介します。

入館料：一般330円、高大生240円、小中生160円

休館日：祝日を除く月曜日、祝日の翌平日

■同時開催

特集展示「源氏物語と大津」

～ 2025年2月2日(日)まで

※本展観覧券でご覧いただけます。

■講演会

「祈りと救済の絵画—平安時代の女性と仏教—」

4月27日(土) 14:00 ~ 15:30

講師：山本聡美氏(早稲田大学文学学術院教授)

「藤原氏の栄華—道長の経筒・彰子の経箱—」

5月10日(金) 14:00 ~ 15:30

講師：宮川禎一氏(京都国立博物館特任研究員)

「日本仏教の中の女性たち

—比丘尼戒壇をめぐる—」

5月17日(金) 14:00 ~ 15:30

講師：大谷由香氏(京都大学白眉センター特定准教授)

定員：各回100名(応募者多数の場合は抽選)

お申込み方法：申込方法など詳細はHPまたは当館まで問い合わせください。

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

を打たれ、提唱した美術の概念です。

本展では、2023年に公益財団法人日本財団より受贈した、45人の日本のアール・ブリュットのつくり手による作品を展示します。

入館料：一般950円、高大生600円、小中生400円

休館日：月曜日(休日の場合は開館し、翌平日休館)

お問い合わせ先：TEL 077 (543) 2111

第93回企画展
紫式部と祈りの世界

4月27日(土)～5月19日(日)

大津市歴史博物館



国宝
寛弘4年(1007)金銅藤原道長経筒
伴延助作
金峯神社蔵

紫式部が生きた平安時代は、藤原道長に代表される摂関家が栄華を誇っていた一方で、天災や戦乱、飢饉、疫病が流行しました。そのため、人々は現世利益を求めて観音巡礼を行い、また、末法思想の広まりから浄土信仰へと傾倒していく時代でも

春季テーマ展
草津市市制施行70周年記念
郷土を伝えるもの
—寄贈資料展—

開催中～5月26日(日)

草津市立草津宿街道交流館



山本章夫撰 溝口月耕画
「教草第十四 青花紙一覽」

当館の寄贈資料の中には、昔から家々に伝わる古文書や生活用具などのさまざまな資料があり、草津市の歴史や、わたしたちの暮らしを知る重要な手がかりとなっています。令和6年10月で草津市が市制施行70周年となることを記念し、大切に受け継がれてきた資料を紹介します。

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円

休館日：月曜日(休日の場合は翌平日)

お問い合わせ先：TEL 077 (567) 0030

滋賀県立美術館開館40周年記念
つくる冒険 日本のアール・ブリュット45人
—たとえば、「も」を何百回と書く。—

4月20日(土)～6月23日(日)

滋賀県立美術館



齋藤裕一《ドラえもん》2003-2006年
滋賀県立美術館蔵 撮影：大西暢夫
画像提供：ボードレス・アートミュージアムNO-MA

日本語では、「生の芸術」と訳されてきたアール・ブリュット。1940年代、フランスの画家、ジャン・デュビュッフェが、精神障害者や独学のつくり手などの作品に心



きっかけはコイの歯から 魚と米と人のかかわり

中島 経夫 著

A5判並製本 総196頁 3080円(税込)

コイ科魚類の歯を研究するために走査型電子顕微鏡があった歯科大学に就職したという異色の経歴をもつ著者が、琵琶湖博物館での学際的な総合研究に至る日々を振り返る。

愛する人へのケアのかたち

医療従事者の家族看護体験

栃本千鶴 編

四六判並製本 総152頁 1760円(税込)

それぞれ両親や夫、妹などの終末期介護を体験した看護師・保健師が、ケアする家族の視点から、緩和ケア病棟や在宅療養の現場とケアされる者の最期の日々を記録。



近代日本を築いた気概と志

明治・大正の土木技術者たち

原 稔明 著

B5判並製本 総186頁 1650円(税込)

アマゾン・楽天ブックスで POD にて発売中

明治の技術官僚や工部大学校卒業生とお雇い外国人の業績を通じて、日本の産業近代化を牽引した若き技術者たちの気概と志に迫る。



地球一周してみたら

聞こえた大自然と人々の鼓動

溪 逸哉 著／溪 久 編

四六判並製本 総132頁 1320円(税込)

シニア夫婦が地球一周の船旅で24の寄港地を105日間で巡った。壮大な自然や古代文明の遺跡などを、歴史をひもときながら紹介する。



自費出版年鑑2023

NPO法人日本自費出版ネットワーク 企画
B5判並製本 総136頁 2420円(税込)

日本で唯一の自費出版に関する年鑑。第26回日本自費出版文化賞の大賞受賞インタビューや、受賞作の内容、受賞者のことば、選考理由などを紹介する。全応募作の書誌情報を掲載。第27回募集要項を付す。



牧野とマキノ マキノスキー場の歴史

青谷藤和 著

A5判並製本 総54頁 非売品

問合先 高島市マキノ町牧野245-2(著者)

スキー客相手の民宿も営んでいた牧野の農家に生まれた著者が、滋賀県初のスキー場が開設された「マキノ」の歴史を地元古老や琵琶湖汽船の協力を得て一冊に。(2023. 8.31刊)



びわ湖畔の小さなムラの物語

守山市美崎地区の200年

伊藤 潔 著

A5判並製本 総94頁 非売品

問合先 守山市今浜町2497(著者)

江戸時代末期の新田開発によって拓かれた湖岸の美崎地区。入植者によるムラの成立、野洲川による水害との闘い、近年の人口増加による発展までの歴史をたどる。(2023.10.20刊)



私の人生、及第点

粕渕行雄 著

A5判並製本 総118頁 非売品

問合先 米原市顔戸758(著者)

戦後間もなく検察庁に就職した著者が、米原駅での食糧管理法違反が仕事の大半だった当時から定年までの検察庁勤めと、趣味の囲碁や家族のことを綴る自分史。(2023.12.17刊)



山笑ひ山満る 山粧い山眠る 吾が行の足跡

芥川和亀夫 著

A5判並製本 総134頁 非売品

問合先 甲賀市甲南町磯尾502(著者)

眼前に広がる白と灰色と黒のモノトーンの世界。——2回のヒマラヤトレッキングを中心に、国内の単独行や家族との登山記録を写真とともに収録。(2023.12.25刊)



佐藤春陽子と世界

伊藤和夫 著

A5判並製本 総106頁 非売品

問合先 彦根市平田町734-4(著者)

平成8年、出張中の香港で、札幌に赴任していた同期の死を知った。45歳の若さで逝った彼と過ごした昭和40年代の独身寮からの日々を、喜寿を迎えた著者が振り返る。(2023.12.30刊)



『淡海文庫72 はじまりは小谷城』刊行記念対談

小谷城 再発見！—あなたの知らない浅井氏居城との遭遇—



小谷城山王丸石垣（中井均氏撮影）

中井 均 氏 × 太田浩司 氏
(城郭研究家) (淡海歴史文化研究所所長)

4月6日(土) 13:30 ~ 15:00

戦国武将浅井氏三代の居城であった小谷城跡は、近年、新たな石垣も見つかり主郭部分の再発掘の必要性が唱えられている。小谷城を知り尽くしたお二人が知られざる小谷城の実像に迫る！

会場 湖北文化ホール

長浜市湖北町速水2745
JR河毛駅下車徒歩10分 駐車場あり

受講料 500円

(小谷城戦国歴史資料館友の会会員
および淡海文化を育てる会会員は無料)

完全予約制 下記までお申し込みください。

お問い合わせ・お申し込み先 小谷城戦国歴史資料館

TEL・FAX 0749 (78) 2320 Email odanitomonokai@yahoo.co.jp



淡海文庫72

はじまりは小谷城

築城500年記念連続講座集

小谷城戦国歴史資料館 編

B6判並製本 総192頁 1650円(税込)

昨年開催の連続講座「はじまりは小谷城」4回分とパネルディスカッションを収録。城づくり、城下町のかたち、経済政策、生活・儀礼道具など、各研究者の視点から戦国北近江の姿を探る。

淡海妖怪拾遺

杉原正樹 著

B6判並製本 総208頁 1650円(税込)

滋賀県には、他府県に負けず劣らず多くの妖怪がいる。妖怪歴30年の著者が、興味のまに書籍や伝承から渉獵する中で出会ったバケモノたちの痕跡を丹念に紹介。



近江学 第15号

成安造形大学附属近江学研究所 編

AB判並製本 総86頁 1980円(税込)

特集テーマは「惣 はじまりのコミュニティ」。中世に起源をもつ惣村の宝庫として知られる近江で、人々は自然災害や集落間の争いとどのように向き合ってきたのか、歴史と現状を考える。



比叡山延暦寺の神さま仏さま

地元ガイドが作った参拝ハンドブック

武覚超 監修／花咲 てるみ 著

A5判並製本 総136頁 2420円(税込)

大津市坂本の観光ガイドが、延暦寺となど協力のもと、最澄による開山以前からの歴史をひもとき、約150もの堂舎、本尊などほぼ全てをオールカラーでわかりやすく解説。



北近江の巨樹を見に行く

自然と歴史と祈りのものがたり

西 岳人 著

A5判並製本 総128頁 2200円(税込)

滋賀県北部の古社寺や集落などに立ち、信仰の対象や歴史の生き証人となってきた50本余りの巨樹をオールカラーで紹介し、ゆったりと時間が流れる世界へといざなう。



表紙写真 「貞享5年相論山川筋田地井溜絵図」（伊野部区有文書）を広げて

編集後記 本文インタビューにあるとおり、3冊目には平成17年(2005)と令和3年(2021)に伊野部の住民に対して行われたアンケートの比較が掲載されています。一部紹介すると、正月飾りは「山に採りに行く」が96%だったのが、「購入」と同数の48%となり、節分の玄閼の魔除けは「している」「していない」が同数だったのが、「していない」が75%で上回るようになり、特別な食べ物として「恵方巻き」が急増し、「いわし」を上回りました。㊥

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先